

令和2年の漁況

安原 豪・寺門弘悦・栗田守人

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年(昭和35年)以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2020年の総漁獲量は約6万4千トンで、前年(2019(令和元)年、以下同様)比123%、平年(2015(平成27)年～2019(令和元)年の5ヶ年平均、以下同様)比81%であった。また、CPUE(1統1航海当り漁獲量)は40.0トンで、前年を上回り平年並みであった。(前年比125%、平年比88%)。なお、2020(令和元)年の漁労体数は11ヶ統(県西部3ヶ統、県東部8ヶ統)であった。

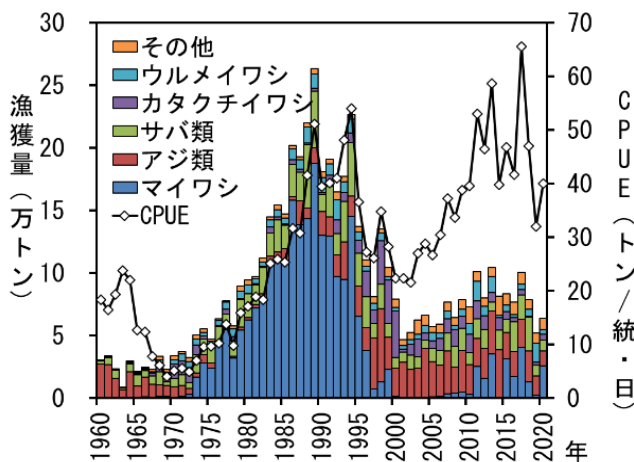


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移(2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値)

本県のまき網漁業の漁獲の主体は、1970年代後半～1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、2011(平成23)年までは同種が主要な魚種となっていた。ところが、2011年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マアジ、サバ類の3種が主要な魚種となっている。魚種別の動向をみると、マイワシ(総漁獲量40%)、サバ類(同13%)、カタクチイワシ(同7%)は前年を上回り、マアジ(同19%)、ウルメイワシ(同6%)は前年を下回る漁況であった。

(2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

① マアジ

令和2年の漁獲量は約1万2千トンで、前年・平年を下回った(前年比79%、平年比59%)。

漁獲の主体は、1歳魚(2019(令和元)年生まれ)、2歳魚(2018(平成30)年生まれ)で、夏季以降は0歳魚(2020(令和2)年生まれ)と1歳魚であった。山陰沖ではマアジは春から初夏にかけて、まとまった漁獲があるが、4月～7月の漁獲量は約7千7百トンで前年並みで平年を下回る漁況であった(前年比90%、平年比77%)。また、秋季(9月～11月)の漁獲量は約1千2百トンで前年・平年を下回る漁況であった(前年比78%、平年比39%)。

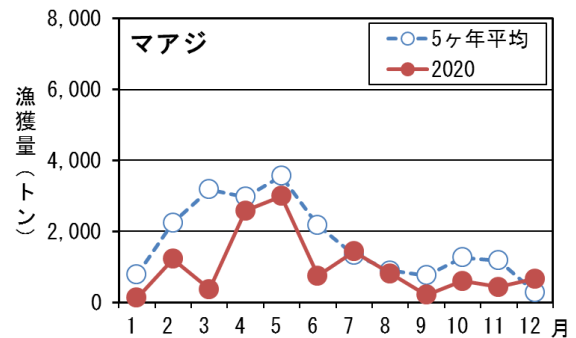


図2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲量

② サバ類

令和2年の漁獲量は約8千6百トンで、前年を上回り平年を下回った(前年比101%、平年比48%)。

漁獲の主体は1歳魚(2019(令和元)年生まれ)で、夏季以降は0歳魚(2020(令和2)年生まれ)も混じって漁獲された。山陰沖ではサバ類の漁獲は例年、秋季～翌春が好調であり、4月～9月にかけては低調となる。本年の冬季(1月～3月)の漁獲は約1千6百トンで、前年・平年を大きく下回った(前年比31%、平年比17%)。また、秋季(10月～12月)の漁獲は約2千2百トンで、前年を上回り平年を下回った(前年比154%、平年比66%)。

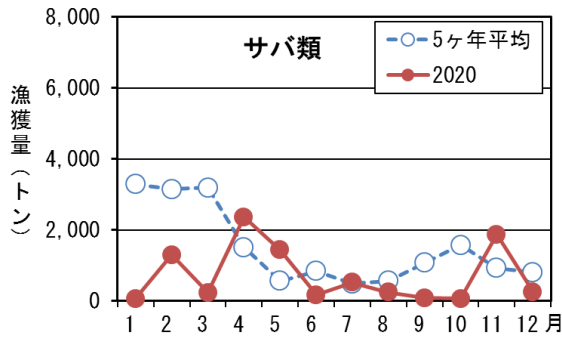


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

③ マイワシ

令和2年のマイワシの漁獲量は約2万6千トンで、前年・平年を上回った（前年比1059%、平年比122%）。近年の月別の漁獲動向は、県東部を主漁場として3月～6月、9月～10月に漁獲がまとまるが、本年は3月～5月に多く漁獲された。

対馬暖流系群のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年（県中型まき網漁獲量約2万5千トン）から漁獲が急増した。2012年以降も約1万5千トン～4万トンの漁獲が続いており、資源量は回復傾向にあると考えられているが、2014年・2019年は低い値となっており、今後の動向を注視する必要がある。

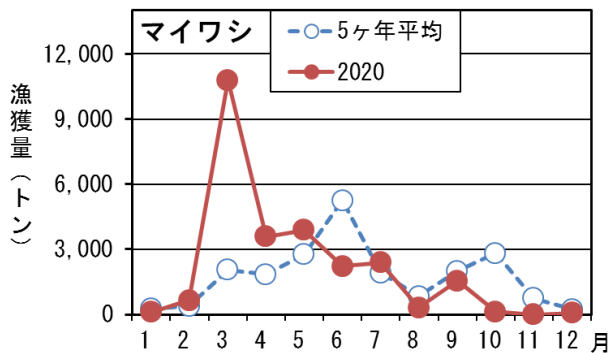


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

④ カタクチイワシ

令和2年のカタクチイワシの漁獲量は約4千5百トンで、前年・平年を上回った（前年比169%、平年比134%）。月別の漁獲動向をみると例年と同様に4月～5月、8月～10月にまとまって漁獲があった。

⑤ ウルメイワシ

令和2年のウルメイワシの漁獲量は約4千百トンで、前年および平年を下回った（前年比27%、平年比64%）。近年、ウルメイワシの漁獲は年変動が大きく令和2年は年間を通して漁獲が少なかった。

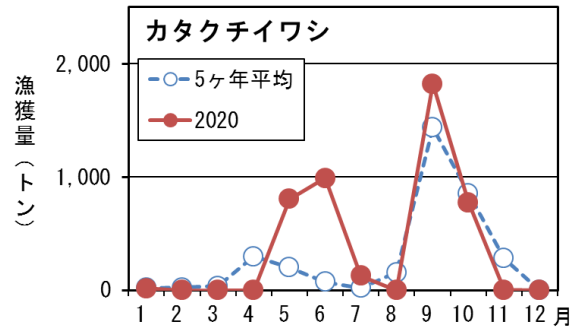


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

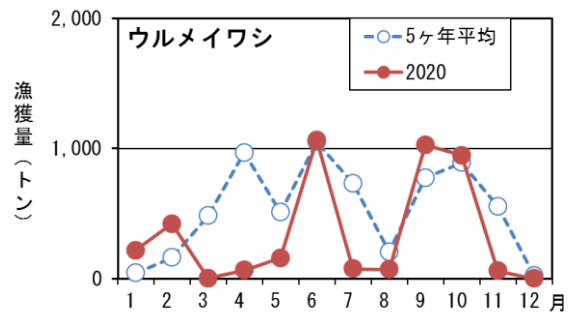


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

ここでは、県内外のいか釣り漁船が水揚げするいか釣り漁業の代表港である浜田漁港（島根県浜田市）に水揚げされた主要イカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向を取りまとめた。対象とした漁業は、いか釣り漁業（5トン未満船）、小型いか釣り漁業（5トン以上30トン未満船）および中型いか釣り漁業（30トン以上）である。

(1) スルメイカ

浜田漁港に水揚げされたスルメイカの2015年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図7と図8に示した。

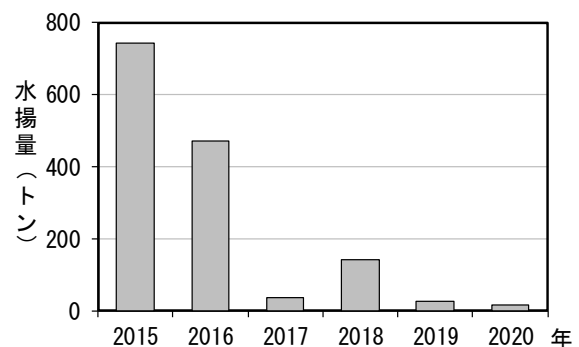


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の経年変化

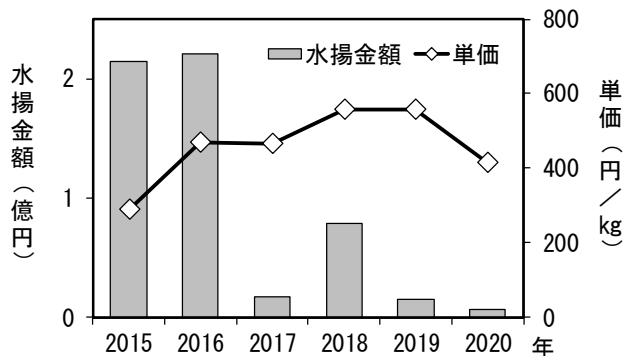


図 8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の経年変化

令和2年の水揚量は16トンで、前年(28トン)、
 平年(285トン)を下回った(前年比58%、平年
 比6%)。2020年の水揚金額は約7百万円(前年
 比43%、平年比6%)であった。キログラムあた
 りの平均単価は415円で、平年(467円)の9割
 であった。

スルメイカの月別の水揚動向を図9に示した。
 島根県沖では、例年、冬季から3月は冬季発生系
 群の産卵南下群が、3月以降は秋季発生系群の索
 餌北上群が漁獲対象となる。2020年は近年の主
 体であった冬季発生系群の水揚量がほとんどなく、
 少量ながら5月をピークに4月~7月にまとま
 った水揚げがあった。近年は両系群の資源状態が厳
 しい状況にあり※、さらに山陰沖への来遊量が少
 ないことが要因と考えられる。

※(国法)水産研究・教育機構水産資源研究所による
 令和2年度のスルメイカの資源評価では、冬季発生
 系群、秋季発生系群の親魚量は、MSY(最大持続生
 産量)を実現する水準を下回るとされている。

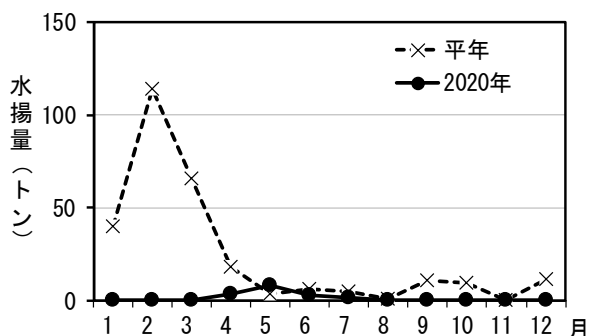


図 9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚
 動向(平年は過去5年(2015年~2019年)の
 平均)

(2) ケンサキイカ

浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの2015
 年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化

を図10と図11に示した。

令和2年のケンサキイカの水揚量は40トンで、
 記録的な不漁であった前年(31トン)は上回った
 が、平年(225トン)を下回った(前年比130%、
 平年比18%)。水揚金額は約6千万円(前年比
 117%、平年比24%)であった。キログラムあた
 りの平均単価は1,468円で、平年(1,194円)の
 1.2倍であった。

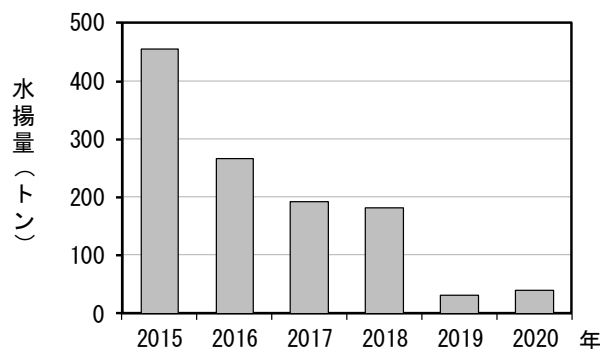


図 10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量
 の経年変化

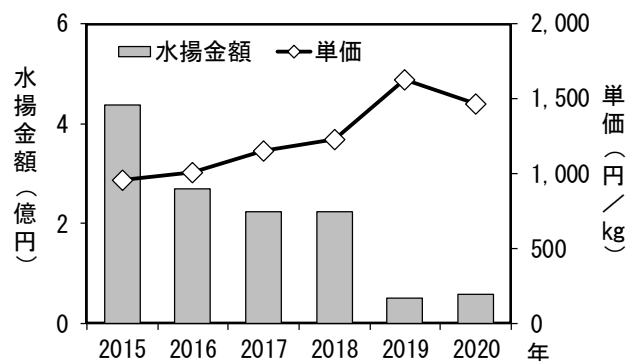


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカ
 の水揚金額と単価の経年変化

ケンサキイカの月別の水揚動向を図12に示し
 た。令和2年のケンサキイカ漁は5月下旬から水
 揚量が増え始め、ケンサキイカ型が主体となる春
 夏来遊群(5月~8月)の漁獲量は平年を下回る
 36トン(平年比61%)、ブドウイカ型が主体とな
 る秋季来遊群(9月~12月)も平年を下回る3ト
 ン(平年比2%)であった。2006年以降、春夏来
 遊群の漁況が不調である一方、秋季来遊群の漁況
 は好調である傾向が続いていた。しかしながら、
 令和元年および令和2年には2年連続して秋季来
 遊群の不漁が続いており、今後の資源動向を注視
 する必要がある。

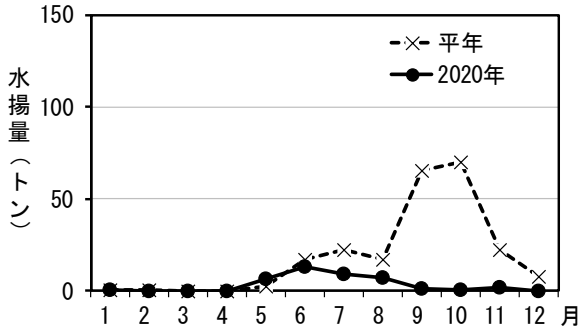


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚動向 (平年は過去5年(2015年~2019年)の平均)

3. 沖合底びき網漁業 (2 そうびき)

本県では現在5統が操業を行っている。本報告では、このうち浜田漁港を基地とする4統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を8月16日~翌年5月31日までとした(6月1日~8月15日までは禁漁期間)。

(1) 全体の漁獲動向 (図 13)

浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業(操業統数4統)の2020(令和2)年漁期(2020年8月16日~2021年5月31日)の総漁獲量は2,541トン、総水揚金額は13億5,723万円であった。また、1統当たりの漁獲量(以下、CPUE)は635トン、水揚金額は3億3,931万円で、漁獲量は平年並みで水揚げ金額は平年を上回った(過去10年平均:628ト、3億603万円)。

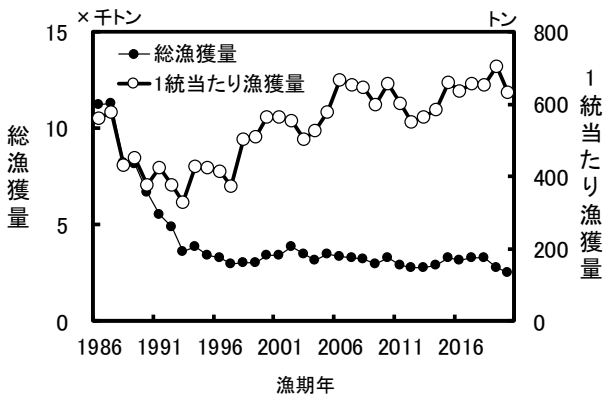


図 13 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり漁獲量の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向 (図 14)

① カレイ類

ムシガレイのCPUEは37トンで平年の6割、ソウハチのCPUEは44トンで平年の1.1倍、ヤナギ

ムシガレイのCPUEは11トンで平年の9割の水揚げであった。

② イカ類

ケンサキイカのCPUEは86トンで平年の2.0倍、ヤリイカのCPUEは29トンで平年の3.6倍の水揚げであった。

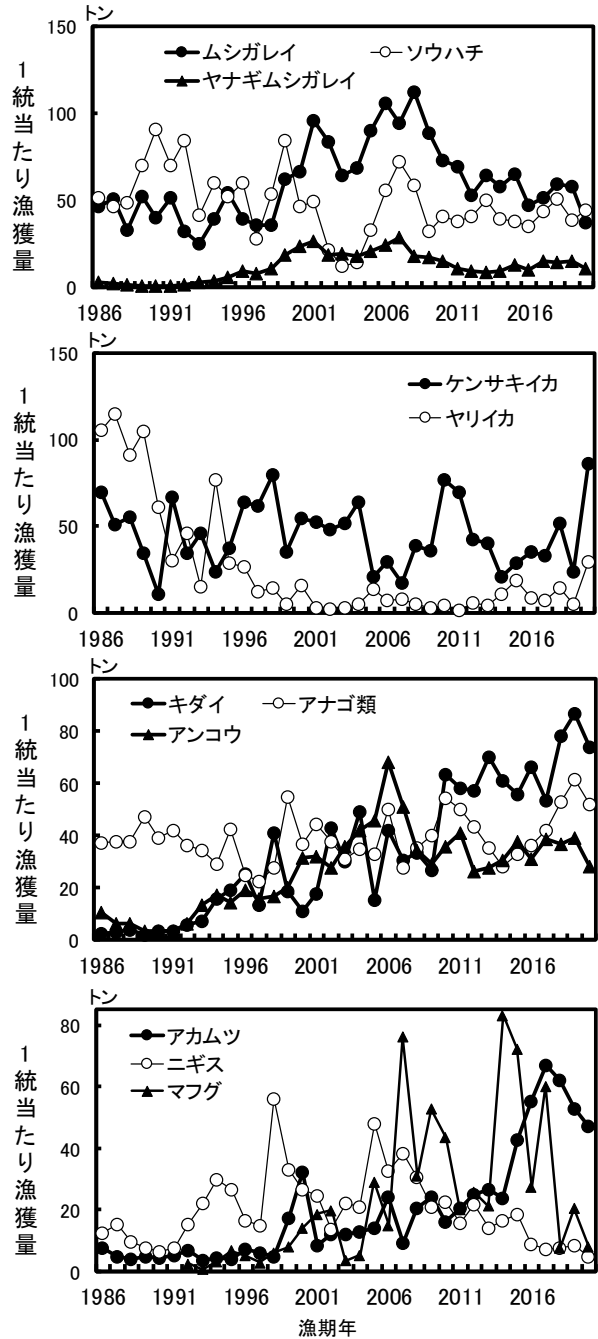


図 14 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

③ その他の魚類

キダイのCPUEは74トンで平年の1.1倍、アナ

ゴ類のCPUEは52トンで平年の1.2倍、アンコウ類のCPUEは28トンで平年の8割、アカムツのCPUEは47トンで平年の1.2倍、ニギスのCPUEは5トンで平年の3割、マフグのCPUEは8トンで平年の2割であった。

この他、マトウダイのCPUEは30トン（平年の1.7倍）、イボダイのCPUEは14トン（平年の3.0倍）、マダイのCPUEは19トン（平年の1.3倍）、カワハギ類のCPUEは12トン（平年の5割）であった。

4. 小型底びき網漁業第1種（かけまわし）

小型底びき網漁業第1種は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深100～200mの海域を漁場とし、現在39隻が操業を行なっている。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を9月1日～翌年5月31日までとした（6月1日～8月31日までは禁漁期間）。

(1) 全体の漁獲動向（図15）

2020（令和2）年漁期（2020年9月1日～2021年5月31日）の総漁獲量は3,353トン、総水揚金額は14億9,521万円であった。1隻当たり漁獲量（以下、CPUE）は86.2トン、水揚金額は3,845万円で、漁獲量では平年を12%下回り、水揚金額では平年を6%下回った（過去10ヶ年平均：98.5トン、4,074万円）。

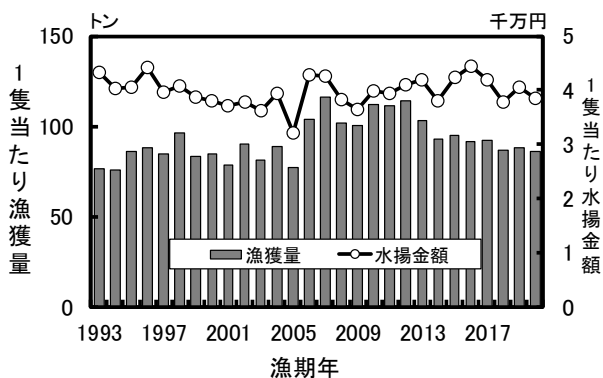


図15 小型底びき網漁業第1種における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向（図16）

① カレイ類

ソウハチのCPUEは15.4トンで、前年の9割、平年の8割の水揚げであった。ムシガレイのCPUEは2.6トンで、前年の9割、平年の8割であった。メイタガレイのCPUEは0.5トンで、前年の9割、平年の7割であった。この他、ヤナギムシガレイのCPUEは1.3トン（平年の9割）、アカガレイの

CPUEは8.0トン（平年の1.4倍）、ヒレグロのCPUEは3.2トン（平年の4割）であった。

② イカ類

ケンサキイカのCPUEは1.7トンで、前年の2.7倍、平年の6割の水揚げであった。ヤリイカのCPUEは4.1トンで、前年の2.7倍、平年の1.7倍の水揚げであった。スルメイカのCPUEは1.1トンで、前年の3割、平年の5割の水揚げであった。

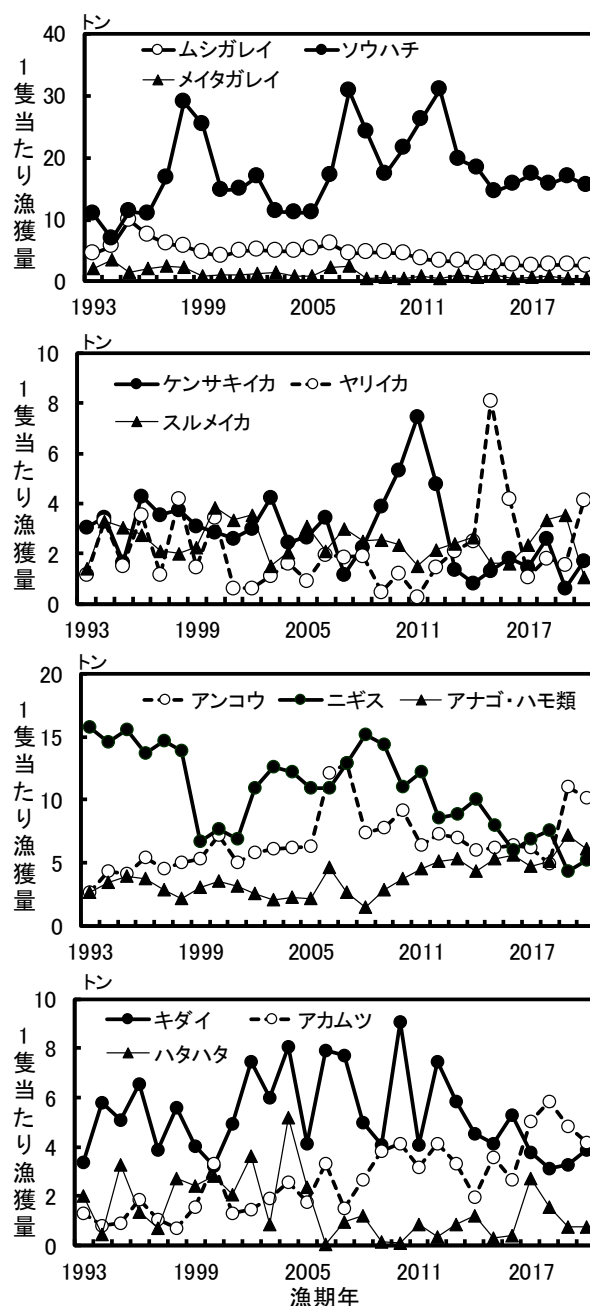


図16 小型底びき網漁業第1種における主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

③ その他の魚類

アカムツのCPUEは4.2トンで、前年の9割、

平年の1.1倍の水揚げであった。この他、アンコウ類のCPUEは10.2トン（平年の1.4倍）、ニギスのCPUEは5.2トン（平年の6割）、アナゴ・ハモ類のCPUEは6.1トン（平年の1.2倍）、キダイのCPUEは3.9トン（平年の8割）、ハタハタのCPUEは0.8トン（平年の8割）の水揚げであった。

5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は、小型底びき網漁業（第1種）の休漁中（6月～8月）に行われる。漁場は本県沖合の水深200m前後、令和2年（2020年）は3隻が操業した。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用等について検討を行った。なお、漁獲量および水揚げ金額の9割程度占めるエッチュウバイについては、別記のエッチュウバイの資源管理に関する研究を参照のこと。

(1) 漁獲動向

令和2年の総漁獲量は68.6トン（前年度比87%）、総水揚げ金額は3,456万円（前年度比86%）であり前年より減少した（図17）。平成元年（1989）の漁獲量は175トン、その後増減を繰り返しながら減少傾向を示し、平成21年（2009年）には100トンを下回った。その後も低水準が継続している。漁獲量減少の原因としては、操業隻数の減少等が考えられ、平成20年代の始めまでは6隻～7隻が操業していたが、徐々に減少し平成28年（2016年）以降は3隻のみの操業となっている。

水揚げ金額も漁獲量の減少に伴って低下しているが、平成15年（2003年）～平成26年（2014年）は漁獲の大部分を占めるエッチュウバイの価格

が500円/kgを下回った期間であり、その影響も大きいと考えられる。

令和2年の1隻当たりの漁獲量は22.9トン（前年度比87%）で、平成28年（2016年）、令和元年（2019年）に続き3番目に高い水準であった（図18）。平成17年（2005年）および平成21年（2009年）に大きく減少したが、平成元年以降20トン程度で推移している。

1隻当たり水揚げ金額は1,152万円（前年比86%）で、近年ではこれも平成28年（2016年）、令和元年（2019年）に続き3番目に高い水準となった。平成元年以降、増減を繰り返しながら減少して、平成21年には576万円まで低下したが、その後回復して平成26年（2014年）以降では1,000万円を超えている。

漁獲の主体となっているエッチュウバイの資源水準が高いため、1隻当たりの漁獲量および水揚げ金額はそれを反映して高くなっている。

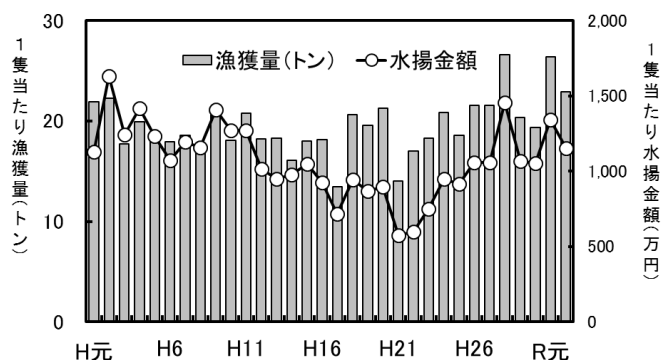


図18 石見海域におけるばいかご漁業の1隻当たりの漁獲量と水揚げ金額の推移

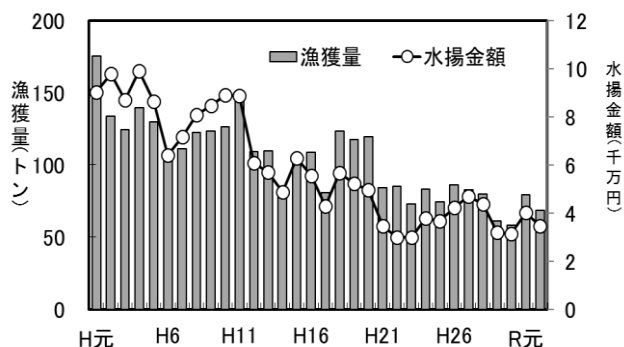


図17 石見海域におけるばいかご漁業の漁獲量と水揚げ金額の推移